

合 同

No. 5 0 2

「復活の証人」

東浦和教会牧師

和泉 美和子



『主よ、どうしたらよいでしょうか』と申しますと、主は、『立ち上がってダマスコへ行け。しなければならぬことは、すべてそこで知らされる』と言われました」（使徒言行録 22 章 10～11 節）。

新しい年が始まりました。気持ち新たに、何か決心された方もおられるかもしれません。春からの新生活を迎え、準備をしておられる方もいらっしゃるでしょう。そんな新年の始まりに、ぜひ一緒に「復活の証人」ということを考えたいと思います。合同教会は、1 月 11 日に一泊のリトリートキャンプを行い、3 月 20 日には信徒大会が予定されています。どちらの委員会も、準備の段階で、委員メンバーは異なっているにもかかわらず、「証しを聞き合いたい」という声が出ました。せっかく集まるなら、主がわたしたちに何をしてくださったのかを互いに分かち合い、そして励まし合いたい、キリスト者ならではの願いです。

使徒パウロは、キリスト者を捕まえるためにダマスコに向かう途中、天からの強い光に照らされて地面に倒れ、主の声を聞きます。パウロの回心と呼ばれる出来事です。実際に起こったことが描かれている 9 章と、自身の経験を語る 22 章、さらに 26 章と、ダマスコでの衝撃の出会い、使徒言行録の中に 3 回も記述されています。実際はもっと語っていたでしょう。この三か所を読み比べてみると、微妙に記述が異なるところがあります。語る相手によって、強調する点が違うことは、わたしたちが証しをするときにもよくあると思います。

パウロが主に対して「主よ、どうしたらよいでしょうか」と尋ねた言葉は、この 22 章だけに登場します。原文を直訳すると「わたしは言った そこ

で 何か すべきことは 主よ」です。

主と出会い、自分が何をすべきか、すぐに応答しているパウロの姿は、そんなに早く切り替えられるの？と驚きつつも、主との出会いはこれまでの人生を方向転換させるだけの力があり、この話を聞いている同胞のユダヤ人たちに、あのナザレのイエスが主であることを印象付けようとしているパウロの熱さが伝わってきます。

この後、パウロはアナニアに会い、「あなたは、見聞きしたことについて、すべての人に対してその方の証人となる者だからです」（15 節）と使命を伝えられました。アナニアはさらに「今、何をためらっているのです。立ち上がりなさい」（16 節）と声をかけます。アナニアの「立ち上がりなさい」と、主の「立ち上がってダマスコへ行け」と、「立ち上がる」ことが繰り返し命じられています。この言葉は、「立つ」だけでなく、「起き上がる」、「復活する」という意味ももっている復活用語です。

死んだ命が復活するという、世の常識では絶対不可能なことが、主イエスによってなされました。聖霊を与えられたペトロも「主の復活の証人になるべき」（使徒言行録 1 章 22 節）と、わたしたちが伝えることは主の復活であると人々に訴えています。パウロは、ダマスコの途上で、一度死にました。しかし、復活の主がパウロに命をお与えになりました。この後、伝道者としての歩みも苦難の連続で数えきれないほど倒れたパウロですが、その度に、主に復活させていただいたのです。力強く証しをし続けるパウロの原点は、やはり主の復活でした。

「あなたは復活の証人です」と告げられて、皆さんはどう感じますか。「いやいや、そんな大それた使命は牧師や伝道者」、「証し？ 準備が大変なので、他の人にお願いします」。思い当たる方はおられますか。確かに、キリストが復活されたとストレートすぎるメッセージは頻繁には出てこないかもしれませんが、しかし、キリスト者はすでに復活の主の命をいただいている者です。わたしたちが生きる日々の生活の中に、倒れたものが起き上がる、命のないところに何かが始まった、復活の出来事はあちらこちらで必ず起こっています。復活の出来事は遠い昔の話ではなく、わたしたちの人生の中で今も続いています。わたしたちは皆証人です。教会の中に証しがあふれる 2026 年でありますように。